

考古学京都学派の影

-なぜ日本考古学には植民地責任意識が希薄なのか-

五十嵐 彰

大正の初年からほぼ 20 年の間、濱田耕作博士を首座とする京都帝国大学文科大学（のち文学部）の考古学教室が日本の考古学界の淵藪となっていたことは、遍く知られている紛れもない事実である。（中略）

濱田耕作博士が主宰されていた頃の栄光に満ちていた考古学教室に関与した人びとの多くは、既に不帰の客となっている。

角田 文衛 1997 「まえがき」『考古学京都学派』雄山閣出版：1-2.

濱田 耕作（はまだ こうさく：1881-1938）

我等の西隣には欧洲学者と競争す可き支那といふ考古学上の未開の大原野を我々は有してゐるのである。朝鮮、満洲といふ屈強な土地を控へてゐるのである。此東亜の文明の淵源を明かにし、支那内地に吾々の学術的勢力を發展することは、日支親善の意義に協(かな)つた、我々の天与の使命では無いか。

濱田 耕作 1917 「我国考古学の将来」『大阪朝日新聞』3月7・10日号
『濱田耕作著作集』第七卷 青陵随想：221-2.

明治の中頃日清戦争の前までの日本の地位国力は、今日から想像出来ない程貧弱なものであつて、政治的経済的の發展の如きも、朝鮮半島や支那に於いて阻まれ勝ちであつた。従つて此等の發展に追従して、常に其の後について行く学術的研究の如きも、其頃までは唯だ日本内地に踰躅して、此等隣接地に進出すると云ふ態度の殆ど見られなかつたことは止むを得ない。考古学の研究も亦其の一つで、日本の研究は日本の資料だけでやつて行き、朝鮮や支那の事などは比較する必要をすら、余り感じなかつた風であつた。然るに此の日清戦争の結果は、東亜に於ける日本の地位を向上せしめ、朝鮮に日本の勢力が確立するやうになり、この政治的發展につれて、朝鮮に於ける考古学的研究が著手せられるに至つたのである。

濱田 耕作 1935 「朝鮮に於ける考古学的調査研究と日本考古学」『日本民族』岩波書店：443.

梅原 末治（うめはら すえじ：1893-1983）

然るに永い南北の争乱がほぼ三十八度線を中心にして中止の状態のままで日本が独立国になつた頃から形勢が一変した。この事変で、京城にのこされた夥しい関係の調査記録類が失われたことが伝えられたに就いて、私の手許にある夥しい関係資料に対し、アメリカのロックフェラー財団の助成に依るその利用を兼ねての整理と復本作製がはじめられることになつた。その際若き同国の学徒、金元竜氏等の参与が、韓国側で拒絶されたばかりでなく、新たにはじまつた日韓両国間の国交条約の締結に当つて、いわれのない日本にある半島遺品の返還の要求が当初日本側での関係者の安易な一部出土品の返還のなされたことがわざわざいして、はては調査そのものへの批難にすら彼地で政策上からでもあろう主張せられることになつた。

梅原末治 1969 「日韓併合の期間に行なわれた半島の古蹟調査と保存事業にたずさわつた一考古学徒の回想録」『朝鮮学報』第 51 輯、147-148 頁

梅原の「東亜考古学」研究の軌跡はとりもなおさず日本帝国主義の大陸膨張の軌跡であり、彼は名実ともに「大日本帝国の考古学者」であった！

もとよりこれはひとり梅原のみならず濱田をはじめ、当時の官学アカデミズムの考古・歴史・美術史の研究者の多くについてもいえることであるが、梅原ほど日本の対外「進出」に巧妙に便乗した学者は他に見当たらない。梅原の「東亜考古学」のあの偉大な業績は、東アジアの民衆にとって、日本帝国主義がもたらした戦乱と抑圧と屈辱と窮乏との悲惨な時代を背景として築かれたことを忘れるべきではあるまい。

だが、梅原の戦後の文章の中からは、そのような事実に対する反省と自己批判の言葉は一言も見当たらない。それどころか、独立を回復した韓国の研究者や当局の民族主義に強い反感を抱いていた形跡すらうかがわれる。

穴沢 味光 1994 「梅原末治論 -モノを究めようとした考古学者の偉大と悲惨」『考古学京都学派』: 270.

長廣 敏雄 (ながひろ としお : 1905-1990)

この際、特に述べておきたいのは、なんとといっても日中戦争により日本は中国に多大の損害を与えたことである。私たちの調査も、思わぬところで彼ら中国人民に被害を与えたのではないかと、深く反省している。頭をたれている。

物心ともに強い圧力となって私たちの上にのしかっていた（ママ）戦争中の厳しさを、戦争を知らない青年たちに伝えたいという気持ちも、私にある。

長廣 敏雄 1988 「はじめに」『雲岡日記 -大戦中の仏教石窟調査-』: 7.

両先生（小島祐馬、羽田亨）への訪問後、私は深刻に自分の将来を考えた。治安維持法がここまでわれわれを縛っているのならば、中国渡航は到底望み薄である。「東方文化研究所」の高名なる評議員の京都大学名誉教授諸先生たちも、所詮は、私たちの同人雑誌「世界文化」の、真剣な文化運動の意義を理解しない。それならば私は「東方文化（研究所）」にいても孤立し、徐々に首を絞められるに過ぎないではないか。

長廣 敏雄 1988 「雲岡 時遥かなり」『雲岡日記』: 33.

(1939年) 八月九日 (水曜)

午前九時、満鉄自慢の「アジア号」超特急列車に乗る。座席の横の空席に刑事らしい男が坐る。発車後、彼は私に話しかけた。どこまで行かれますか、と問う。私は蒙疆地帯（戦時中、内蒙古南部と山西省北部をそう呼んでいた）です、と答える。彼曰く、そこは赤色ルートですな、と妙にからんだ言葉だ。私はかねてから用意している文句、「僕は国威宣揚に行くんですよ」と吐き捨てるように応対した。途端に、男は失礼しましたとかなんとか言って座を立てて行ってしまった。

長廣 敏雄 1988 「雲岡 時遥かなり」『雲岡日記』: 38.

ドイツ大使館クレッチマル少将を案内する。

(ナチス・ドイツの大使館付き武官だ、と直感的に気づく。不愉快な案内役だが、引き受ける。)

長廣 敏雄 1988 「雲岡の石窟調査と漢墓 昭和 17年夏・秋」『雲岡日記』: 133. 216.

当時、心の中で矛盾があるわけです。軍のお世話にならなければ調査できないようなところを、自分はあえ

て調査に行っている。また軍の言うままになっているじゃないか。もっと言うならば、軍国主義に私も毒され、文化侵略をしているというようなことになるんじゃないかという、心の中に矛盾があるわけです。

しかし私から言うと、そうじゃないんだ。おれたちは軍をうまく利用してこういう調査をしているんだと、こう考えた方がいいということです。だから私は、別に軍に対して卑下したというようなことはありませんけれども、とにかく軍を利用してこういう大調査をやったと考えております。

長廣 敏雄 1986 「わが回想の記」『橘女子大学研究紀要』第 13 号 : 243.

一美術愛好者である自分は、去る九月廿日(ママ)大同同盟電報によつて、山西省大同を占拠したわが軍は、大同懸域より西南約三十支里にある雲崗大石窟寺の保護令を發して、千古の美術品の敗散(ママ)支那兵の破壊行為から之を守つたときいて、これでこそ日本軍だと深く心に銘した。(中略)

筆者は支那の今日、残されてゐる歴史的建築物が、たゞ僅かに岩山を彫つて石窟とした所謂石窟寺のみを止めているのを実見した。しかも支那の貧農や無頼徒は金銭に代へるために平時でもそうだが殊に飢饉、戦渦に遭へばその石窟内に寝食して仏頭、仏体を破壊、売却するのである。この古美術の価を坑道内の鉱石を掘りけると同様に考へるか、或はその破壊を防いで保護するかの違いによつて、動物人間であるか一人の人間であるかの差が生ずる。赤十字のマークを掲げた船を襲撃するか否かの相違にも似るのだ。

NT1937 「戦塵余録『大同石仏』保護令 -皇軍の文化擁護-」『土曜日』第 42 号
1974 『土曜日』復刻版、三一書房

じつは、「皇軍」の石仏保護を讃美した「NT」とは、長廣のイニシアルである。先にとりあげた『土曜日』掲載記事は、長廣や水野が調査計画を立案する以前に、「NT」こと長廣が執筆した。水野らによる第一回調査終了から一年を経て、今まさに、長廣は「皇軍」とともに「文化の擁護」を実践することになったのである。

藤井 祐介 2007 「統治の秘法 -文化建設とは何か-」『大東亜共栄圏の文化建設』人文書院、27.

勿論、この時期における中国大陸での調査が、軍隊に守られてのものであることはいふ迄もない。しかし、激しさを増す戦争のさなかで、雲岡石窟調査が奇妙な別世界を形造っていたのは何故であろうか。水野・長廣両先生をはじめ、お二人を助けて調査に参加された人々は皆、学問的に極めて重要であり、しかも芸術性にあふれ、そのうえ実に大規模である雲岡石窟の魅力に取りつかれ、ひたすら、その全貌を細部にいたるまで、徹底的に説き明かそうとする学問情熱をもって石窟調査に取組み、なにものをも私されなかったからではなからうか。研究調査が同時に、世界的に貴重な文化史蹟の保存事業に結びついていたからこそ、この事業の正当性を誰に向かっても堂々と主張し、さらには戦後の困難な時期に、いち早く出版にこぎつけることも可能となったのである。

秋山 進午 1994 「長廣敏雄先生の歩まれた道」『考古学京都学派』角田文衛編 : 165.

小野 勝年 (おの かつとし : 1905-1988)

日比野 丈夫 (ひびの たけお : 1914-2007)

われわれがもしこの地域に関して、生きたまことの認識を得ようとするならば、このような地理的・歴史的事情を明らかにすることが必要である。だから過ぎ去った昔、この地方において人びとが営んだ歴史的な活動を知るということは、それが単なる知識にとどまるのではなく、常に現在を知るためのものであり、さらに未来を洞察するものでなければならぬ。大同の石仏や、八達嶺の長城は、この際、歴史を如実に語ってくれる

ものなるが故に貴い。そうした偉大な史蹟でなくとも、先人の残した歴史的記念物は、それがこのような認識の最もよき手段なるが故に価値があるのである。まことの価値あるものは、これを保存し保護することが必要である。これが後人の義務である。しかし、歴史的記念物がいかに現在を知る重要な手段であるとしても、それはその実態が明確にされての上である。その実態を把握し、過去に対する正確な知識を獲得するということは、時には保存・保護よりさらに重要なのである。

1942(昭和 17)年秋に行われた陽高県古城堡における漢代古墳の調査は、実に上述のような趣旨に基づいて行われたものである。ただ深く閉ざされた神秘の姿をあばこうとする好奇心をもって出発したものではない。人心の最も奥深い根底から発した真摯な探求欲から出ていることはいまでもないところである。(中略)

今回の調査は実にこの実態を明らかにして、それによって過去の歴史を構成すべき活資料を供するとともに、その結果を通じ、あるいは調査そのものを通じて、現状の認識になんらかの寄与をなさんとして試みられたのである。

小野 勝年・日比野 丈夫 1990 『陽高古城堡 -中国山西省陽高県古城堡漢墓-』

東方考古学叢刊 乙種第八冊、東方考古学会、六興出版：2.

何故かういふところの発掘をやつたかといふことを少しばかり申しますと、昨年の秋に萬安懸の古墳が、東方文化研究所の大同石佛の調査をやつてをられました水野さん長廣さんあたりの手で発掘されました。随分いろんな珍しいものが出まして、この辺一帯にセンセーションを起したのであります。その結果、陽高の方にもかういふ古墳があるから一つ掘つてみたらどうか、といふことを当時懸の参事官であつた田村といふ人が提案されたのであります。それでは面白いから一つ掘らうぢやないか、といふことになりました。

日比野 丈夫 1943 「蒙疆陽高懸の古墳調査に就いて」

『蒙疆に於ける最近の考古学的発見』 大東亜学術叢誌 1、大東亜学術協会：8.

苦力の募集にはこの古城堡の村公所が懸公署の命令を受けて當りました。その各村の割當は、私共から今日は六十人人夫を出せ、今日は五十人人夫を出せと申しますと、村公所からこの村は三人来い、この村は四人来い、この村は二人来いといふ風で引つ張つて来るのです。しかし只使ふのと違ひます。最近までは人夫の賃金は普通一圓二三十銭、この頃はもう少し多く一圓五六十銭、高いところでは二圓位の出してをります。それを普通より少しやすくで雇ふ。その代り相手もさるもの一人前に働く大人はちつとも来ない。よぼよぼの爺とか七つ八つの子供が来る、しかしこつちも負けてゐない、そんなものは駄目だといつて途中で帰し、お前はもう一日中幾ら働いても一銭もやらぬ、もつと元気な親父を呼んで来いといつて追ひ返します、そういふと子供は泣き泣き帰つたりしますが、それ位やらぬとなかなか彼等の方がうは手でこちらがやられてしまふのであります。

日比野 丈夫 1943 「蒙疆陽高懸の古墳調査に就いて」『蒙疆に於ける最近の考古学的発見』

大東亜学術叢誌 1、大東亜学術協会：14-15.

吉井 秀夫 (よしい ひでお、1964-)

こうした植民地朝鮮における日本人の調査活動に対する評価は、その立場により大きく異なる。まず、実際に調査に関わった日本人研究者達は、「日本人の古蹟調査事業は、朝鮮半島の古蹟の実態を明らかにし、それを保存する役割を果たした」と主張した。それに対し、大韓民国(以下、「韓国」と表記)や朝鮮民主主義人民共和国(以下、「北朝鮮」と表記)の研究者達は、「日本人の古蹟調査事業は、朝鮮民族の文化財の破壊・略奪であり、その成果は植民地支配の正当化のために用いられた」と主張してきた。

しかし、このような議論を進める前提となるべき、当時の調査研究の実態を明らかにする作業は、必ずしも進んできたわけではない。

(中略)

朝鮮古蹟調査事業については、いわゆる文化財返還問題との関係で議論されることが多い。しかしこのように、発掘調査に関連する資料が日韓で分断され、しかもその実態がまったく明らかになっていないことこそが、より重大な問題ではないだろうか。 吉井 秀夫 2013 「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学」『考古学研究』第60巻 第3号、考古学研究会：17-27.

今、文化財の返還が問題になっていますが、古蹟及遺物保存規則の施行以前から、石塔や仏像などの文化財は日本に流出しています。また、高麗青磁なども、おそらく日露戦争の前後あたりから高麗時代の墳墓が大々的に盗掘されることによって流出していきました。では、規則施行によって流出が止められたかといえば、そうではなかったわけです。むしろ、朝鮮古蹟調査事業によって、楽浪漢墓をはじめとする墳墓から出土する遺物に対する注目が高まると共に、大々的な盗掘が1910年代の終わり頃から1920年代に進みます。そうした動きは実質的に止めることはできなかったし、最終的にコレクターの手に渡った盗掘品を取り上げることもできない。逆に、古蹟調査事業に関わった研究者が、コレクターのもつコレクションの図録作成を手助けしたりすることもありました。このような状況ですから、原則と実態というものを分けて、どれくらい原則が徹底できたのかどうかを、批判的に検証していく必要があるかと思えます。

吉井 秀夫 2013 「朝鮮古蹟調査事業と「日本」考古学（討論）」：49.

問い：なぜ「日本考古学」は戦争責任・植民地責任という意識が希薄なのか？

なぜ自らの過去を直視できないのか、その要因を明らかにしなければならない。

結論：二重の正当化

1. 過去の正当化（過去の誤り、先人がなした不正な行為を直視することなく、うやむやにしていること）
2. 現在の正当化（現在の誤り、過去から継続している不正な状態を改善することなく、放置していること）